吉塚 4

－吉塚遺跡群第4次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第552集

1998

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と歴史が残されており、これを後世に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な努めであります。福岡市教育委員会では、近年の開発事業によって失われていく埋蔵文化財について、事前調査を実施し、記録の保存に努めてまいりました。

本報告書に収録した吉塚遺跡第4次調査では、多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が、文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　町田　英俊

例　言

1．本章は、共同住宅建設に先立って福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、吉塚遺跡群第4次調査（福岡市博多区堅粕4丁目509-1,2,3）の概要報告書である。
2．本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3．本章に使用した遺構実測図は、大庭・本田浩二郎・折茂山利が作成し、折茂由利が浄書した。
4．本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5．本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・大庭康時が作成し、森本・井上涼子・上瀬貴代子・折茂が浄書した。
6．遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7．遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・小田麻美子・深田みどりがあたった。
8．本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

第一章　はじめに

1．調査にいたる経過

平成６年10月３日、平野善憲氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区堅粕４丁目509-1,2,3に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、堅粕遺跡群のほぼ中央に位置し、周辺では、それまでに３次にわたる発掘調査が実施されていた。これらの点から、本申請地においても埋蔵文化財が遺存している事は、十分に予想された。

埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要である旨を回答、既存建物の解体を待って、翌年２月１日試掘調査を実施した。その結果、現地表から１メートルほどで地山の砂層に達し、その面上で奈良～平安時代の井戸・土坑などを検出した。当初の開発計画は集合住宅であり、その基礎が地下１メートル以内におさまるのであれば、慎重工事として開発を許可するという所見がつけられた。

その後、ビル建築の共同住宅に計画が変更され、結局発掘調査が必要となった。発掘調査の日程が具体化したのは、平成８年であり、８月の盆明けから調査に着手することで協議がすすみ、８月下旬までの予定で比恵遺跡群第59次調査に入っていた大庭康時が調査を担当する事になった。

平成８年８月12日、開発業者である大末建設株式会社と現地で打ち合わせを行い、８月20日から調査に着手、それまでに現場事務所の設置等の条件整備を進めてもらう旨を取り決めた。そして、予定通り、８月20日バックホーによる表土掘削を開始し、発掘調査を開始した。

2．発掘調査の組織と構成

調査委託	平野善憲		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田　英俊
調査総括	同　埋蔵文化財課	課長	荒巻　輝勝
	同　第二係長	山口譲治	
調査庶務	同　第一係	西田結香	（前任）
		河野淳美	（現任）
調査担当	同　第二係	大庭康時	
		本田浩二郎	
調査作業	石川君子　井口正愛　江越初代　大久保元枝　大久保学　大庭智子 折茂由利　河野恒子　岸本祥子　渋村和憲　清水明　杉山正孝 関加代子　関義種　曾根崎昭子　都野浩之　永隈和代　長田嘉造 能丸勢津子　早川浩　宮崎タマ子　村崎祐子　吉田清		

そのほか、発掘調査に関する諸々の条件整備、調査中の便宜については、大末建設株式会社からのご協力をいただいた。記して、感謝の意を表したい。

遺跡調査番号	９６３２			遺跡略号	ＹＳＺ　４
調査地地籍	福岡市博多区堅粕4丁目509-1,2,3			分布地図番号	博多駅36
開発面積	630㎡	調査対象面積	300㎡	調査面積	288.94㎡
調査期間	1996（平成８）年８月20日～10月２日				

3．遺跡の立地と歴史的環境

福岡平野の海岸部は、博多湾岸に形成された数列の砂丘によって何重にも縁取られている。これらの砂丘上には、弥生時代以来生活の営みがみられ、多くの遺跡が残されている。著名なものを西からあげると、三角縁神獣鏡を副葬した方形周溝墓が見つかった藤崎遺跡、弥生時代終末期から古墳時代初頭の標識遺跡である西新町遺跡、中世都市として著名で弥生時代から現代まで途切れることのない複合遺跡である博多遺跡群、中世博多と並んで町ができ箱崎宮の門前町でもあった箱崎遺跡群などがある。吉塚遺跡群は、博多遺跡群と箱崎遺跡群のちょうど中間の、最も内陸側に形成された砂丘上に営まれた遺跡である。

吉塚遺跡群が乗る砂丘の東端には、平安時代以来、堅粕薬師として親しまれてきた東光院が残る。東光院の境内は福岡市指定の史跡、仏像は国指定の重要文化財となっている。数基の板碑が現存しており、第４次調査地点のすぐ東側にも馬頭観音堂の中に祭られている。

吉塚遺跡群では、これまで３回の発掘調査がなされてきた。既に報告書が刊行された第１次調査と第２次調査および周辺の遺跡群についてその概要を見ておきたい。

［第１次調査］　都市高速道路の建設にともなって行われた発掘調査である。土坑・溝・掘立柱建物跡・井戸などを検出した。時期は、弥生時代中期から中世に及ぶ。貨泉・銅鏃・山陰系土器など注意すべき遺物が出土している。

［第２次調査］　民間の共同住宅ビル建設にともなって実施した発掘調査である。古墳時代前期から近世以降にわたる遺構を検出した。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸などを検出し、時期は古墳時代前期から近世に及ぶ。また、遺物としては弥生時代中・後期の土器片も出土している。中世の遺構が比較的多く報告されていることに、注目したい。

豊遺跡群

吉塚遺跡群の南側に、遺物散布地として想定された遺跡である。地形的には、砂丘群の後背湿地となる。たびたび試掘調査が実施されたが、遺構の検出例は全くない。

堅粕遺跡群

吉塚遺跡群のひとつ海側の砂丘上に立地する。８次（第２次調査は欠番）の調査を実施している。古代の集落遺跡であるが、越州窯青磁・緑釉陶器・墨書土器など特殊な遺物も見られ、律令期の公的施設の存在も考えられている。なお、この遺跡群の北側からは、古墳時代前期の方形周溝墓が調査されており、古代を中心とする南側とは別の性格の遺跡である可能性が強い。

吉塚祝町遺跡

吉塚遺跡群の北、堅粕遺跡群の東側に、平成９年に発見された遺跡である。堅粕遺跡の延長にも見えるが、昭和前期の地図から地形を復元すると、堅粕遺跡の砂丘とは浅い谷を隔てるようで、別の遺跡として新たに登録することになった。弥生時代中期の甕棺墓を最古の遺構として、古墳時代・古代・中世の遺構が調査されている。古墳の横穴式石室が調査され、墳丘こそ失っているものの、砂丘上に古墳が築かれていたことが確認された。また、中世の遺構は、重層的な生活面を伴って残っており、活発な生活活動の場（＝町？）であったことを思わせる。

吉塚本町遺跡

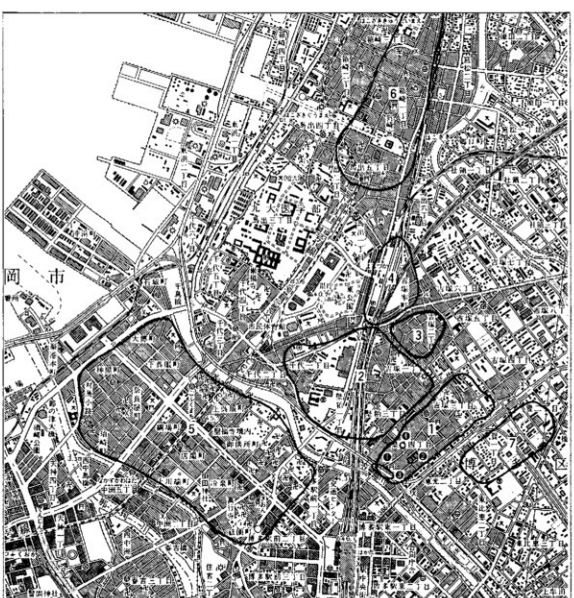
堅粕遺跡群の北側に位置する。これまでに４次の調査を実施している。弥生時代後期から古代の集落遺跡である。土錘や製塩土器などの漁具・生産用具の一方で、瓦や硯も出土しており、やはり何らかの公的性格が想定される。

箱崎遺跡群

吉塚本町遺跡のさらに北側に位置する。粕屋平野を西流してきた宇美川が、流れを大きく北に転じて形成した南北に伸びる砂丘上に乗った遺跡である。10世紀に勘請された箱崎八幡宮の門前町であり、中世は箱崎津としても知られる。現在までに11次の発掘調査がなされ、古代末から近世の遺構が検出されている。

博多遺跡群

吉塚遺跡群・堅粕遺跡群の西に位置する。言うまでもなく、中世都市「博多」の遺跡である。これまで100次を越える発掘調査を実施している。弥生時代中期から現代まで続いた複合遺跡である。わが国最大の対外貿易の港であり、膨大な量の輸入陶磁器が出土することで著名である。調査次数が重なるにしたがって、町割りの復元など、中世の都市景観も検討できるようになりつつある。



1 吉塚遺跡　①～④第1次～第4次調査　2 堅粕遺跡　3 吉塚祝町遺跡
4 吉塚本町遺跡　5 博多遺跡群　6 箱崎遺跡　7 鳥遺跡

Fig. 1　周辺遺跡分布地図（1/25,000）

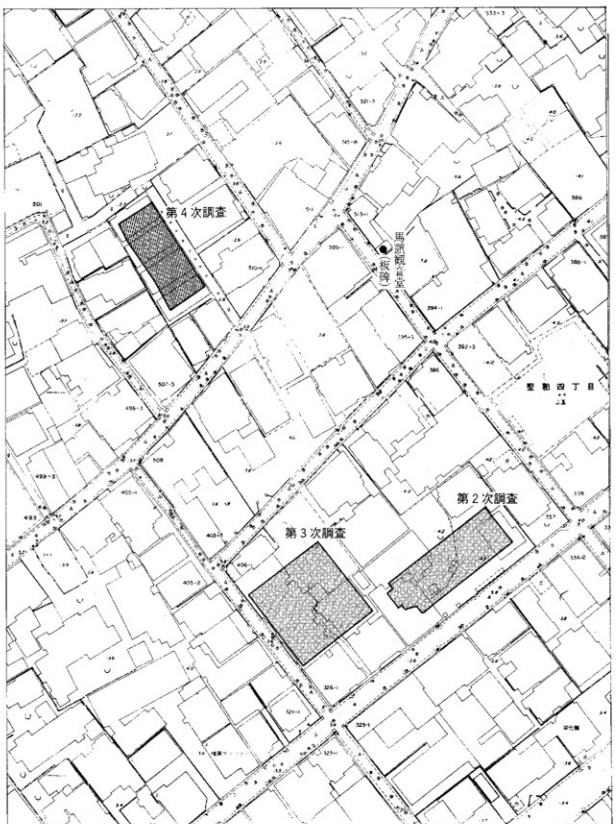


Fig. 2　調査地点位置図（1/1,000）

第二章　発掘調査の記録

1．発掘調査の方法と経過

試掘調査の所見にしたがって、現地表下１メートル前後の砂層面で遺構を検出することとし、バックホーで表土掘削を行った。残土搬出は見込まれていなかったため、調査区内で打って返しすることとし、まず、敷地北半分について調査し、その終了後土を返して、南半分を調査した。

検出した遺構は、検出時の平面形態から溝・井戸・土坑・柱穴にわけ、それぞれ検出順に通し番号をつけた。そのため、土坑として登録した遺構が、掘り上げたところ井戸となった例が少なくない。以下の記述にあたっては、本来の用途にしたがって井戸として記述し、括弧付けで登録してある土坑名を示すことにした。

実測は、調査区の形状に即して基準線を設け、全体を20分の１で、個別の図面は必要に応じて10分の１で作成した。標高は、吉塚小学校に福岡市下水道局が設置している基準点からひいてきた。写真は、35ミリ版と６×７版それぞれモノクロとカラースライドで撮影した。

以下、簡単に経過を記す。

８月20日　バックホーで表土掘削開始。隣家より、事前の挨拶がない旨苦情が寄せられる。業者の対応の不備である旨を説明し、作業を継続するが埋蔵文化財課に電話があり、翌日係長が出向くまで中断することになる。

８月21日　午後より表土掘削作業再開（８月23日まで）

８月26日　遺構調査開始。

９月９日　バックホーによる打って返し（９月11日まで）

９月17日　９月１日付けで福岡市教育委員会に採用された本田浩二郎が調査担当に加わる。

９月30日　埋め戻し。調査終了。

10月２日　調査器材撤去。

2．基本層序

調査区全面ほぼ同様の層序を示す。基盤は砂丘砂層で、その上に砂質土の包含層、さらにそれを盛土層が覆う。Fig.3に、調査区南西壁で取った土層図を示す。

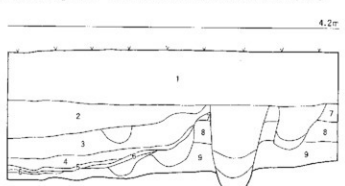


Fig. 3　調査区南西壁土層実測図（1/40）

3．発掘調査の概要

第4次調査では、弥生時代から鎌倉時代さらに近世以降におよぶ遺構・遺物を検出した。遺構としては、井戸・土坑・柱穴・溝などがある。

井戸は、平安時代から鎌倉時代・近世以後のものが検出された。井側の痕跡をとどめるものが多かったが、木質の遺存状態は非常に悪かった。

土坑では、弥生時代から鎌倉時代のものがみられた。27号土坑は、底を欠いた弥生時代の甕を正置した土坑で、性格・用途は不明である。12世紀から13世紀にかけて営まれた19号土坑や21号土坑は、整った方形のプランを呈するもので、廃棄土坑とするよりも、貯蔵施設の可能性が考えられる。博多遺跡群に見られる方形竪穴遺構と類似しており、注目される（24頁参照）。

柱穴から掘立柱建物跡を推定するのは困難であった。

出土遺物は、土器・陶磁器などがコンテナ39箱、石製品・金属製品は1箱分出土している。

Ph.1　第1区全景（南東より）

Ph.2　第2区全景（北西より）

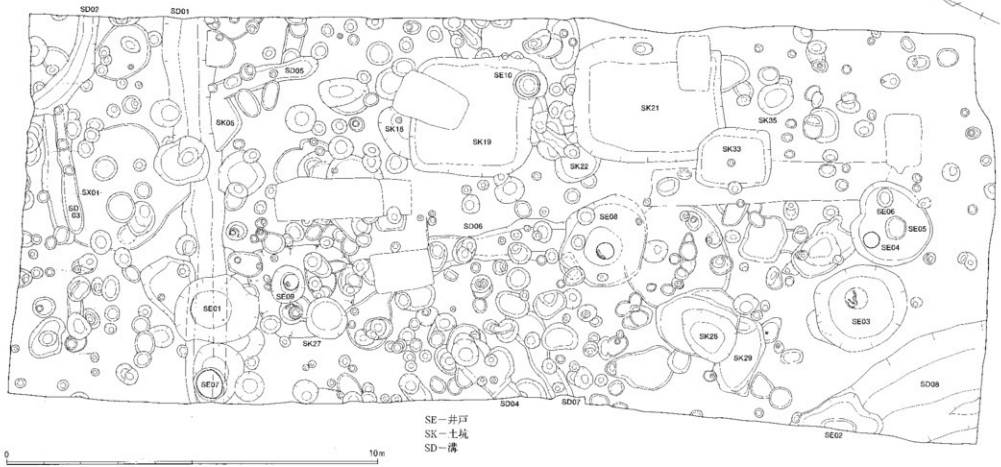


Fig. 4　遺構全体図（1/100）

4．遺構と遺物

次に主要な遺構について、その出土遺物とともに紹介する。

(1) 井戸

1号井戸（Ph.3）

長径2.3メートル、短径1.9メートルの楕円形の掘り方を持つ井戸である。一部に井側の木質が残っており、それからみて直径1.1メートル程度の円形の井側であったと推測される。

近世以後の井戸である。

2号井戸（Ph.4）

調査区南西角付近から検出したもので、大部分が調査区外にでるので、規模等は不明である。

近世の染付が出土している。

3号井戸（Fig.5、Ph.5）

長径2.6メートル、短径2.3メートルの楕円形の掘り方を持つ。井側は、直径60センチの円形の木質が残るが、遺存状態が悪く、その構造等は知り得ない。

砂目の唐津や伊万里の色絵磁器の破片などが出土している。

4号井戸（5号・6号井戸）（Fig.6・9、Ph.6・7）

直径2.2メートルのややいびつな円形の掘り方を呈する。65センチほど掘り下げたところで、井側3基を検出した。井側のひとつをそのまま4号井戸とし、他のふたつを5号井戸、6号井戸とした。4号井戸の井側は直径約45センチの結い桶である。5号井戸と6号井戸の井側はそれぞれ径60

Ph.3　1号井戸（南西より）

Ph.4　2号井戸（南東より）

Ph.5　3号井戸（南より）

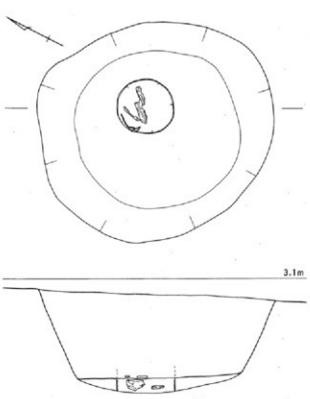


Fig.5　3号井戸実測図（1/40）

センチ、50センチの略円形を呈するが、構造は不明である。

Fig.9-1～5に、出土遺物の一部を示す。1は、須恵器の坏である。底部にへら記号がみられる。2は、白磁の碗である。3は、龍泉窯系青磁の碗で内面に劃花文が描かれる。4・5は、陶器である。4は、褐釉の水注の頸部である。5は、陶器B群の四耳壺である。この他、瓦器碗の小片が出土した。

5号井戸からは龍泉窯系青磁の劃花文碗、6号井戸からは白磁、龍泉窯系青磁、陶器が出土している。いずれの井戸も12世紀後半に位置づけることができよう。

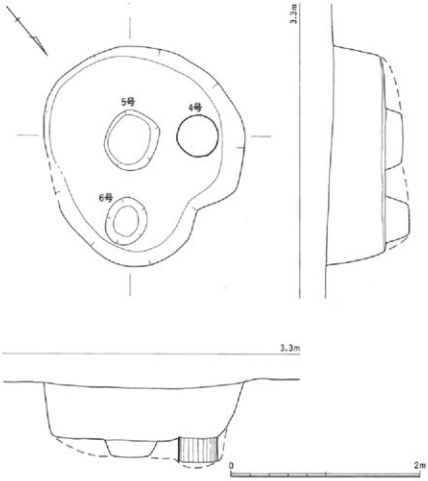
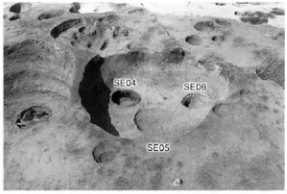
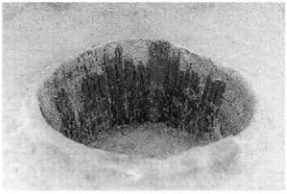


Fig.6　4号井戸（5号・6号井戸）実測図（1/40）



Ph.6　4号井戸（5号・6号井戸）（南東より）



Ph.7　4号井戸井側（南東より）

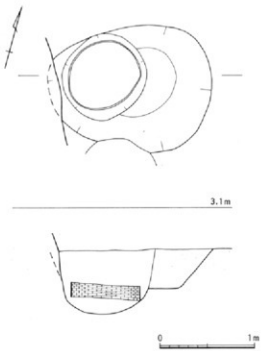
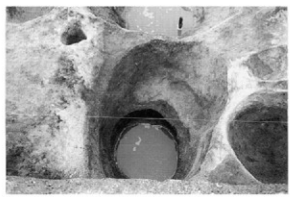
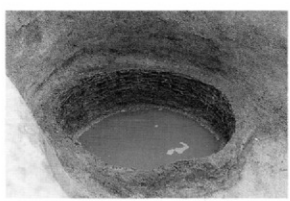


Fig. 7　7号井戸実測図（1/40）



Ph.8　7号井戸（南西より）



Ph.9　7号井戸井側（北東より）

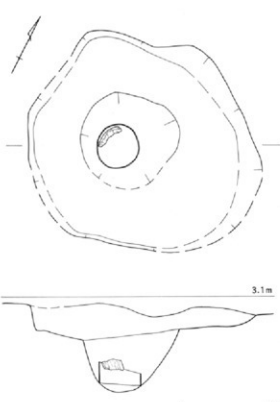
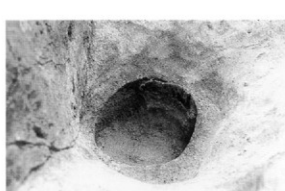


Fig. 8　8号井戸実測図（1/40）

Ph.10　8号井戸（北西より）



Ph.11　8号井戸井側（北より）

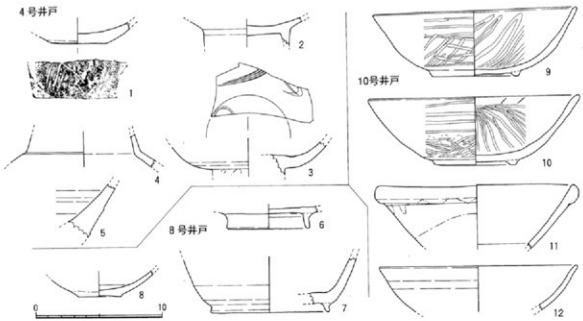


Fig. 9　4号・8号・10号井戸出土遺物実測図（1/3）

7号井戸（4号土坑）（Fig.7、Ph.8・9）

長軸1.7メートル、短軸1.4メートルの卵型を呈する。西側に寄って直径75センチの井側が出土した。井側周囲にも掘り方があるようで、あるいは4号土坑とは別の遺構かも知れない。井側の木質は、遺存状態はきわめて悪いが、編み篭状に見える（Ph.9）。

伊万里の染付が出土している。

8号井戸（12号土坑）（Fig.8・9、Ph.10・11）

直径2.4メートル前後の略円方の掘り形を呈する。掘り方中央からやや西に寄って、直径45センチの円形の井側を据える。井側の木質の遺存状態は悪いが、木目の観察から曲げ物と知れた。井側内には、斜めに落ち込んだ板材も見られた。

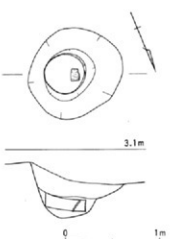
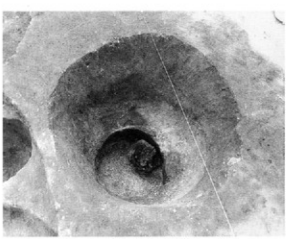


Fig.10　9号井戸実測図（1/40）

Fig.9-6・7は、**土師器**である。6は碗で、高台径は大きく、外反気味に高く直立する。7は、高台坏である。器壁は摩滅し、調整痕をとどめていない。8は、**白磁**の皿である。底部は露胎となる。この他、弥生時代後期壺片、古墳時代前期甕片、須恵器片、瓦器片などが出土した。白磁・瓦器の出土からみて、12世紀前半代の井戸と考えられる。



Ph.12　9号井戸（北東より）

9号井戸（13号土坑）（Fig.10、Ph.12）

直径1メートルほどの円形の掘り方を持つ。掘り方中央から若干東に寄って、井側が残る。井側は、木質の観察から曲げ物と推定できる。曲げ物の中には、斜めに落ち込んだ状態で、板材が1枚出土している。前述した8号井戸と非常に類似し

た状況であり、意図的なものとすれば、井戸廃絶に関わる共通した祭祀行為を想定することもできよう。

出土遺物は少なく、井側内と掘り方からそれぞれ土師器と須恵器の破片が出土したにとどまる。時期を限定することは困難だが、古代前半、須恵器の小片からあえて言えば、7世紀代と考えられる。

10号井戸（24号土坑）（Fig.11・9、Ph.13～15）

後述する19号土坑に切られた井戸である。掘り方は、径1メートル前後の円形を呈すると推定される。掘り方の中央に直径64センチの結い桶を伏せて井側とするが、木質が残るのみであった。桶の高さは、最も高いところで38センチをはかるが、19号土坑に切られるため本来の寸法は知り得ない。なお、井側の内側は径50センチ、深さ20センチほどくぼんでいた。桶や曲げ物をおいた痕跡はないが、水溜が設けられていたものと思われる。

出土遺物の内、図化できたものをFig.9-9～12に示す。9・10は、筑前型の**瓦器**碗である。9の内面は、横なでした後こて当てで平滑に均し、大きくジグザグ状のへら磨きを加える。外面は上半は横なでの上に疎らに横へら磨き、下半は指押さえの上に粗い分割へら磨きを行う。10もほぼ同様だが、へら磨きに規則性を欠く。11・12は**白磁**で、それぞれⅣ類・Ⅱ類の碗である。この他、底部回転糸切りの土師器Ⅲも出土した。12世紀中頃に比定できよう。

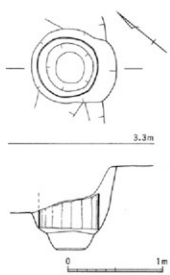
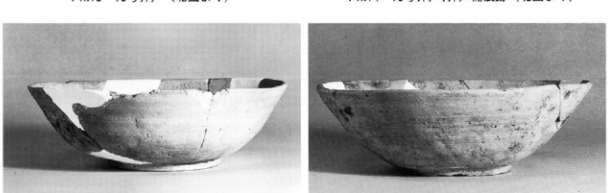


Fig.11　10号井戸実測図（1/40）

Ph.13　10号井戸（北西より）

Ph.14　10号井戸、井戸桶痕跡（北西より）



Ph.15　10号井戸出土遺物

(2) 土坑

第4次調査では、32基の土坑を検出した。ここで土坑としたものは、大型の掘り方を持つ遺構を指す。したがって、井戸・柱穴・溝のように用途・機能を特定できるものを除いた、すべての掘り込みを含んでいる。それをすべてここで報告するのは、紙数の関係から不可能なので、主要なものについて紹介するにとどめる。

5号土坑（Fig.13）

1号溝に切られた土坑で、その一部が残っていたに過ぎない。深さ11.8センチをはかる。Fig.13-1・2に出土遺物を示した。1は、**須恵器**である。脚部を欠くが、高坏であろう。坏部の中央から下位にかけて、棒状工具による刺突文がならぶ。2は、**土師器**の高坏の脚である。裾部の上面には、へら磨きが施される。これらの遺物からみて、5世紀後半代の遺構と考えられる。

18号土坑（Fig.12・13）

次に述べる19号土坑に切られた遺構である。一部分が残っていたに過ぎない。深さは、27センチをはかる。

土師器・須恵器・土錘などが出土した。Fig.13-3は、**須恵器**の坏蓋である。端部から若干内側に入った位置に、身を受けるかえりがつく。4は、**土師器**の壺である。口縁は、滑らかな弧を描いて短く外反する。遺存部分は内外面ともに横なで調整されるが、頸部下位の内面は、なで上げている。5は、**土錘**である。一端を欠く。全面を指なでして、丸く仕上げる。端部には、穿孔が見られる。この他、須恵器坏身破片、土師器の高坏脚破片などが出土した。7世紀後半と思われる。

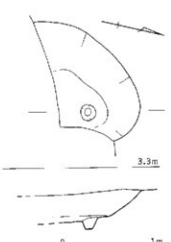


Fig.12 18号土坑実測図(1/40)

19号土坑（Fig.14～16、Ph.16・17）

一辺3～3.2メートルをはかる、ほぼ隅丸方形の土坑である。検出面からの深さは44センチで、南壁を除いて急角度で立ち上がる。床面はほぼ平坦で、2.7メートル四方の7.29平方メートルをはかる。調査時の判断ミスで、あまり適切な位置で断面を切ってはいないが、土層図を作成しているので、Fig.15に示す。

Fig.16-1は、**弥生式土器**の壺であろう。丁寧にへら磨きされる。2は、**須恵器**の坏蓋である。1・2は、混入遺物である。3は、**土師質土器**の取り瓶である。手捏ね成形で、二次的に被熱し焼き締まっている。4・5は、筑前型**瓦器**の碗である。幅広で単位の見にくいへら磨きが施されている。6は、龍泉窯系**青磁**の碗である。無文であるが、これとは

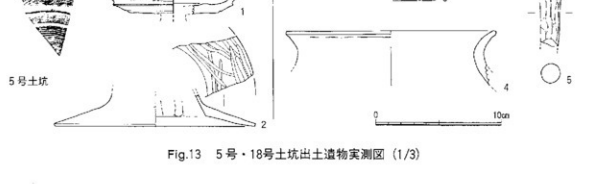


Fig.13 5号・18号土坑出土遺物実測図（1/3）

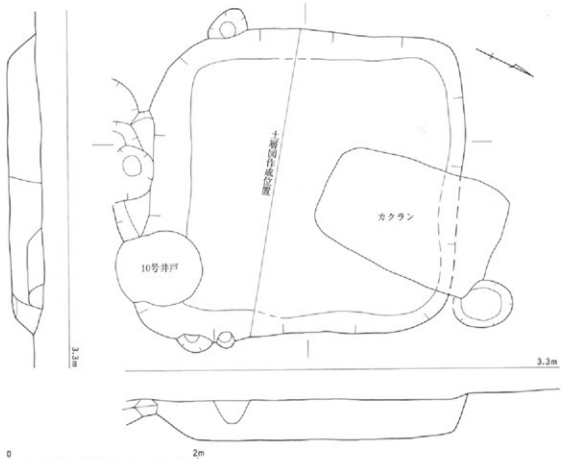
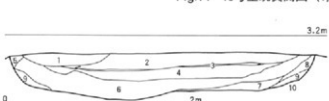


Fig.14　19号土坑実測図（1/40）



1．暗茶褐色砂質土、土器片・炭化物まじり
2．黒褐色砂質土、土器片・炭化物まじり
3．黒色砂、土器片まじり
4．黒褐色砂質土、土器片・炭化物まじり
5．茶色砂
6．黒褐色砂質土、粘質土まじり、土器片・炭化物まじり
7．黒褐色砂質土、砂まじり、土器片・炭化物まじり
9．暗茶色砂質土、少量の砂まじり
9．茶色砂
10．淡茶色砂＝地山

Fig.15　19号土坑土層実測図（1/40）

Ph.16　19号土坑（北東より）

Ph.17　19号土坑土層（南より）

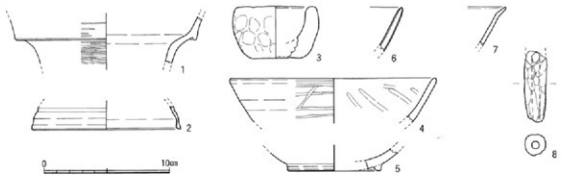


Fig.16　19号土坑出土遺物実測図（1/3）

別に鎬蓮弁文の碗も出土している。7は、**白磁**の碗である。口縁部の釉を削り取り、いわゆる口はげに作る。別に、口はげの皿も出土した。8は、管状**土錘**である。この他、底部回転糸切りの土師器坏、銅製品の小片、鉄滓が出土した。13世紀前半に比定する事ができよう。

21号土坑（Fig.17～19、Ph.18・19）

打って返しの北区と南区にまたがって検出した土坑である。両区画で表土掘削の深度が若干違い、南区の方が30センチほど掘りすぎているので、土坑の上端のプランに食い違いができてしまった。北区に準じて復元的に計測すると、長辺4.2メートル、短辺3.4メートルの長方形を呈し、検出面からの深さは64センチをはかる。床面は平坦で、長辺3.4メートル、短辺2.4メートル、面積8.16平方メートルである。打って返しの前に、北区南壁のこの部分で土層実測図を作成したので、Fig.17に示す。

Fig.19に出土遺物を図示する。1は、**弥生土器**の鉢である。2は、**土師器**の皿である。底部は回転糸切りで、内底部には静止なで調整を加える。口径8.0センチ、器高0.8センチをはかる。3・4は、白

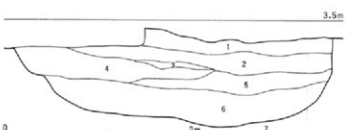


Fig.17　21号土坑土層実測図（1/40）

Ph.18　21号土坑（北より）

Ph.19　21号土坑断面（北西より）

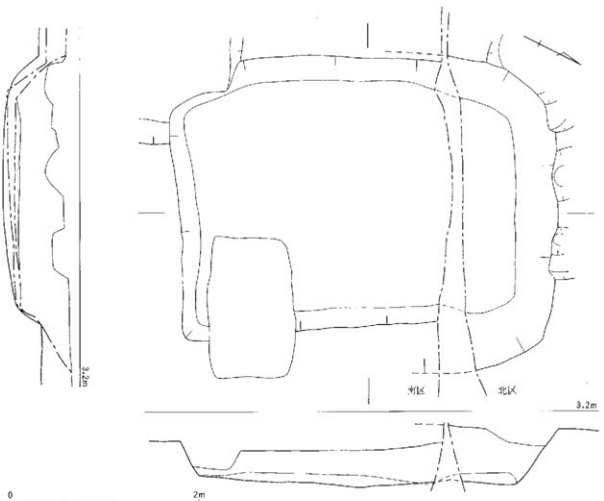


Fig.18　21号土坑実測図（1/40）

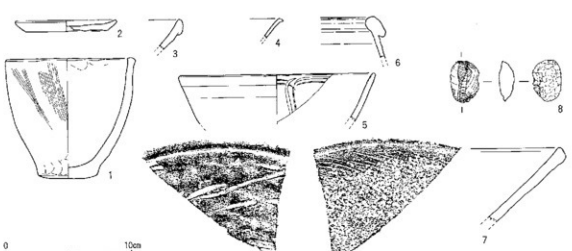
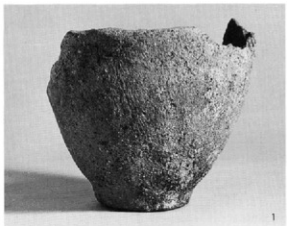


Fig.19　21号土坑出土遺物実測図（1/3）

磁の碗である。5は、龍泉窯系青磁の碗である。6は、褐釉陶器の鉢である。7は、瓦質土器のこね鉢である。外面は指押さえ、内面は刷毛目調整だが、使用のため細かい半球状の剝離がみられる。8は、黒曜石の剝片である。背面には、原石の球面をとどめている。この他、須恵器片や同安窯系青磁の破片も出土している。12世紀後半の土坑と考えられよう。



Ph.20　21号土坑出土遺物

22号土坑（Fig.20・22）

21号土坑の北西角に切られた土坑で、径1.3メートルの略円形を呈する。深さは、16センチをはかる。

Fig.22-1～3は、弥生土器である。1は、壺である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は口縁部で横方向の刷毛目調整、肩部はなで調整を行う。2は、高坏であろう。口縁部は横なで調整、体部は刷毛目調整する。3は、甕の口縁である。横なで調整する。この他、器台の脚部片などが出土している。弥生時代終末期の土坑と考えて、大過なかろう。

27号土坑（Fig.21・22、Ph.21・22）

一辺2.4メートルほどのほぼ隅丸方形を呈する、浅いくぼみ状の土坑である。深さは、20センチ前後をはかる。中央からやや西よりに、さらに土坑を掘って、底部を抜いた甕形土器を据えていた。

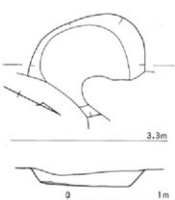


Fig.20　22号土坑実測図（1/40）

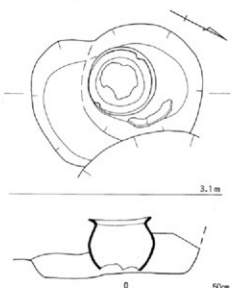


Fig.21　27号土坑土器出土状況実測図（1/20）

Ph.21　27号土坑（北より）

Ph.22　27号土坑土器出土状況（北東より）

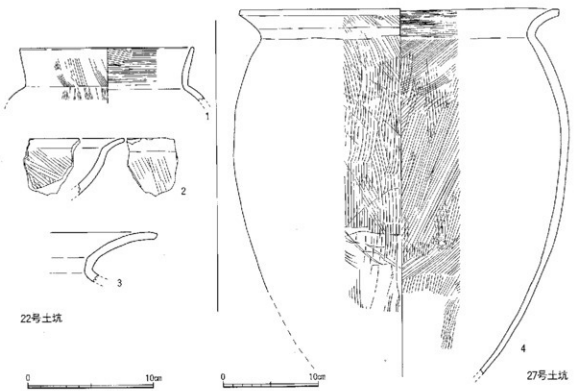


Fig.22　22号・27号土坑出土遺物実測図（1～3-1/3，4-1/4）

Fig.22-4は、土坑中に正置されていた甕形土器である。内外面とも、刷毛目調整を施す。土坑中に打ち欠いた胴部下位の破片が散らばっていたため、掘られていた状態よりもやや下位まで接合・実測できたが、実測図左側の胴部の端付近で割られていた。この他、小型甕の口縁部や器台の裾部の破片が出土しており、弥生時代後期前半に位置づけることができる。

28号土坑（Fig.23・24）

長軸2.3メートル、短軸2.0メートルの楕円形を呈するが、掘り上げたところさらに、長軸1.65メートル、短軸1.28メートルの卵形に落ち込みが見つかった。切り合いの可能性があるが、調査段階では識別できなかった。

出土遺物を、Fig.24に示す。1～7は、**須恵器**である。1は短頸壺、2は坏身、3は蓋の口縁、4は甕、5は広口壺、6・7は高坏の脚である。4の頸部には、弧線のへら記号がみられる。5には、頸部と肩部に櫛描き波状文、肩部の波状文の下には櫛状工具による刺突文が施される。8は、**土師器**の甕である。口縁は、玉縁状に肥厚する。9・10は**弥生土器**である。9は甕で、内面はなで上げ、外面は刷毛目をなで消す。10は、コップ形の鉢である。11～15は、**土錘**である。端部に穿孔する。16

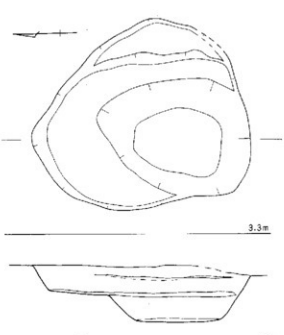


Fig.23　28号土坑実測図（1/40）

は、棒状の**土製品**である。蒲鉾型の断面を呈する。17は、**砥石**である。仕上げ砥であるが、被熱したようで、剥離が進んでいる。これらの須恵器からみて、7世紀前半の土坑と思われる。

29号土坑（Fig.25・28）

長径2.1メートル、短径1.3メートルの楕円形の土坑で、28号土坑に切られる。検出面からの深さは、48センチをはかる。

Fig.28-1～4に出土した**弥生土器**を図示した。1は、鉢である。内面は横なで、外面は縦刷毛目調整で、内面から外面の上半にかけて、丹塗りする。2は、無頸壺である。口縁は、逆L字形に屈折し、上面に穿孔する。内面はなで、外面はへら磨きで、丹塗りする。3は、ひさご形土器である。内面は、板状工具を用いてなで上げており、明瞭に痕跡が残る。外面は横なでで、丹塗りする。4は、甕である。口縁は「く」字形に立ち上がる。内外面とも横なで調整するが、口縁の内面には、指で押さえて成形

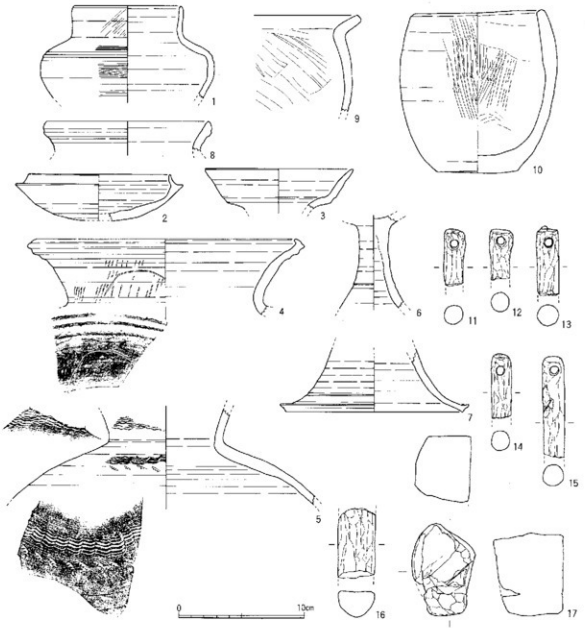


Fig.24　28号土坑出土遺物実測図（1/3）

した痕跡が、浅いへこみ状に並んでいる。これらの土器からみて、弥生時代後期初頭の遺構と考えられる。

33号土坑（Fig.26、Ph.23）

長辺1.9メートル、短辺1.5メートルの長方形を呈する土坑で、深さは28センチをはかる。床面の中央に、直径20センチ、深さ12センチの小ピットが掘られている。前述した21号土坑を切る。

出土遺物は小片ばかりで、図化できなかったが、土師器皿（底部回転糸切り）、白磁、陶器などが出土した。12世紀後半以後、あまりくだらない時期の土坑であろう。

35号土坑（Fig.27・28）

長軸1メートル、短軸0.8メートルの卵形を呈し、検出面からの深さは48センチをはかる。

Fig.28-5～9に出土遺物を示した。5・8は、**土師器**である。5は、小型丸底壺である。外面は細かい刷毛目調整、内面は密にへら磨きを施す。8は、高坏の脚である。内外面とも、強い横なで調整を行っている。6・7は、**須恵器**である。6は、短頸壺の蓋であろう。天井部は回転へら削り、他は横なで調整する。7は、坏蓋である。口縁の内面に身を受けるかえりがつく。天井部は回転へら削り、他は横なで調整で、内面の中央には静止なでを加える。9は、**土錘**である。この他にも、土師器・須恵器の小片が出土している。

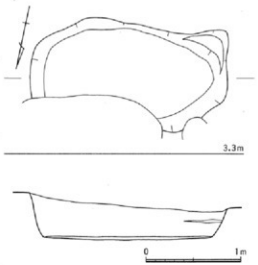


Fig.25　29号土坑実測図（1/40）

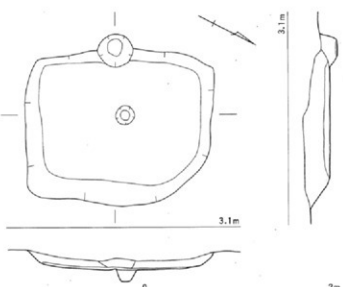


Fig.26　33号土坑実測図（1/40）

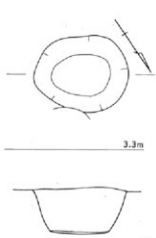
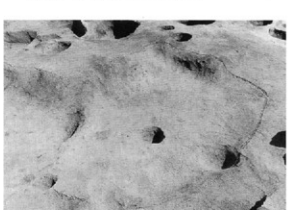


Fig.27　35号土坑実測図（1/40）



Ph.23　33号土坑（西より）

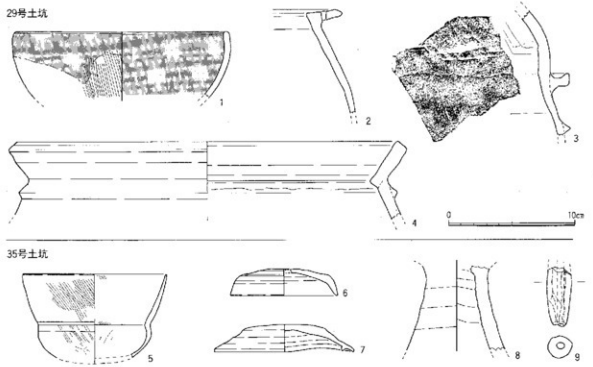


Fig.28　29号・35号土坑出土遺物実測図（1/3）

須恵器の坏蓋の年代観からみて、7世紀後半に当てるのが妥当だろう。

(3)　溝状遺構

第４次調査では、８条の溝状遺構を検出した。以下、概要を略述する。

１号溝

調査区を東西に横断する溝で、近代のものである。

２号溝

調査区北東角に、弧を描いて検出された溝である。出土遺物には、近世の染付が１点混じっていたが、他は須恵器と土師器のみであり、十層観察からも古代に遡る可能性が高い。

３号溝

溝２に切られる。短いもので、区画施設と思われる。弥生時代後期の土器片が出土している。

４号溝

調査区西壁から短く伸びたもの。区画溝か。弥生時代後期の甕・器台などの土器片が出土した。

５号溝

１号溝に切られる。短い溝で、区画溝であろう。弥生土器片と滑石の破片が出土している。

６号溝

調査区中程を南北に通る溝であるが、やはり縦貫せず、区画溝と思われる。弥生時代後期の甕片が出土している。

７号溝

４号溝に近く平行する溝で、短く終わっている。弥生土器の壺底部・甕底部・鉢口縁部・高坏口縁部などが出土した。弥生時代後期後半にあてられる。

8号溝

調査区南西角を斜めに、弧を描いて横切る溝である。遺物は少なく、須恵器と土師器の小片が出土したに過ぎない。2号井戸に切られる。

(4) その他の遺構・遺物

上記の他にも、すべての遺構から多数の遺物が出土している。それらをいちいち報告する余地は既にないので、目についたものだけ、ここにあげることにする。

Fig.29-1は、SX01から出土した**弥生土器**である。**SX01**は、直径3メートル前後の略円形の浅い落ちで、深さ10センチ前後をはかる。若干くすんだ砂がたまっていたもので、壁も明瞭には確認できなかった。しかし、遺物を包含しており、図示した土器は、正立した状態で出土した(Ph.24)。弥生時代後期前半の鉢である。直行した口縁を持つ深鉢形を呈し、口縁は横方向になで調整するため、わずかに外反して見える。底部は、平底である。内外面ともに縦方向の刷毛目調整を施す。

Ph.24　SX01土器出土状況（東より）

Fig.29-2は、**112号柱穴**から出土した**石製品**である。軟質の石材を研磨して成形したもので、穿孔はないが頭部の小さい勾玉状を呈する。112号柱穴からは、弥生土器片が出土している。

Fig.29-3は、**32号土坑**から出土した滑石製の**平玉**である。32号土坑からは、この他須恵器片・土師器片が出土した。

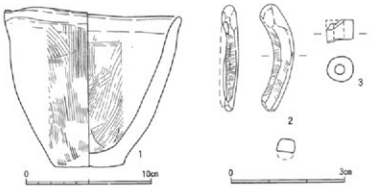


Fig.29　その他の出土遺物実測図（1-1/3，2･3-1/1）

Ph.25　SX01出土土器

第三章　まとめ

第４次調査では、弥生時代から鎌倉時代にいたる集落跡が検出された。これまでに述べた遺構に基づいて、時期別に整理しておく。

弥生時代

竪穴住居跡・井戸など明瞭な生活遺構を検出した訳ではないが、この時期の遺物のみが出土する遺構は少なくなかった。ただし、中期に遡る遺構は見あたらず、最も古いもので後期初頭に属すると思われる（29号土坑）。

底を抜いた甕を据えた27号土坑や、鉢を正置したSX01など、何らかの意図を持って土器を埋置した遺構があることは、本調査地点が、弥生時代後期の集落の中にあって明らかに生活の場としての位置（生産の場とか埋葬の場、集落の縁辺とかではなく）を占めていたことを物語るものである。検証の術はないが、削平されて失われた竪穴住居跡の存在を想定しても良いかもしれない。

古墳時代

古墳時代前期の遺構・遺物は、皆無に近かった。特に、庄内式系・布留式系の土器がほとんど見られなかったことは、注意して良いだろう。むしろ、そのことが即ち、古墳時代前期の生活の欠落を示していると言えようか。本調査地点で古墳時代の遺構・遺物がみられるのは、５世紀後半からである（５号土坑）。しかし、その後も依然として貧弱で、７世紀代になって遺構が増加する（９号井戸・18号土坑・28号土坑・35号土坑など）。

古代

奈良時代や平安時代前半に、明らかに比定できる遺構も見あたらない。ただし、柱穴ではあるが、251号柱穴からは８世紀後半の須恵器が出土しており、掘立柱建物跡等がこの時期に存在した可能性まで否定することはできない。

中世

本調査では、14世紀以降に下る遺構・遺物は、全く検出できなかった。中世の遺構の主体は、12世紀後半代にあるようで、本書に掲載した遺構を時期別に整理すると次のようになる。

12世紀前半	８号井戸
12世紀中頃	10号井戸
12世紀後半	４号井戸・５号井戸・６号井戸・21号土坑・33号土坑
13世紀前半	19号土坑

さて、本調査地点の中世集落の性格について若干気付いた点を挙げておきたい。かつて、堅粕遺跡第６次調査の報告書で、堅粕遺跡・吉塚本町遺跡では中世の遺構が見つかっていないという点を指摘したことがある（『堅粕２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第405集　1995年）。これに対し、吉塚遺跡では、第1次調査以来決して濃厚とは言えないが、中世の遺構が検出されてきた。堅粕遺跡・吉塚本町遺跡の場合、問題点は、両遺跡が西に博多遺跡群、東に箱崎遺跡群と中世の都市遺跡に挟まれた

立地であるということにあった。すなわち、両側の町場の境界装置あるいは境界認識、それと不可分である「場」の認識・性格の問題である。もとより、わずか数回の発掘調査で検討可能な訳はなく、考察を保留して結びとした。それでは、当吉塚遺跡ではどうだろうか。

まず立地を考えると、吉塚遺跡の乗る砂丘はおそらく博多遺跡群や箱崎遺跡が乗る砂丘よりも、内陸側の列であり、厳密には一連の地形とは言えないことを前提として知らなくてはならない。その上で、博多遺跡群や箱崎遺跡と一連の地形につながる堅粕遺跡・吉塚本町遺跡で中世が欠落していることを考え合わせれば、吉塚遺跡の中世遺構は、博多遺跡群・箱崎遺跡とは無関係に成立したものと推測できるのではなかろうか。

一方、吉塚遺跡第4次調査地点の中世遺構は、13世紀代までで消滅してしまう。鎌倉時代末前後から、中世都市「博多」の東に広がる松原には板碑が造立されるようになる。福岡市域に現存している板碑375基の内、箱崎・馬出・千代・堅粕・吉塚で210基（56%）を占めており、その造立のピークは南北朝期にあるという。実は、第4次調査地点のすぐ東側の馬頭観音堂内にも、2基の板碑が立っている（紀年銘なし）。これらの板碑は、「博多」の住民によって造立・供養されたと思われるのだが（大庭康時「中世都市博多の縁辺」博多研究会誌第4号　1996年）、本調査地点付近もそういう言わば「博多」の聖域の一部に組み込まれた可能性も考える必要があるのではなかろうか。

最後に、19号土坑と21号土坑について触れて置きたい。両者は、長方形もしくは方形のプランを呈し、比較的深く、ほぼ平坦な床を持つ。筆者が博多遺跡群検出遺構で方形竪穴遺構と呼んでいるものと、ほぼ共通する遺構である（大庭康時「博多遺跡群における中世考古資料の分布論的検討メモ」博多研究会誌第5号　1997年）。その文中では、貯蔵庫様の機能を持つ都市的な遺構と考えた。それが、吉塚遺跡で検出されたことについて、博多遺跡群からの影響を想定することができるのであろうか。今後類例の検出に留意する必要があろう。

Ph.26　馬頭観音堂板碑

吉塚 4

－吉塚遺跡群第４次調査の概要－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第552集

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷 博巧印刷株式会社
福岡市東区那ノ川１丁目９－７

吉塚 4

—吉塚遺跡群第4次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第502集

1998年

福岡市教育委員会